

哀悼の詞(木島先生の訃報に接し)

人生100年時代とは言え、92歳の天寿を全うされた恩師。

現在八十路に在るものにとっては見事という他ありません。

「生老病死」、「哀別離苦」が人の世の習いであることは承知しておりますが、日々を大切に刻み過ごす者にとっては1日の意味は大切です。

一口に長寿といってもそれは決して容易なものではありません。

先生が私たち3年2組を担当されたのは僅か1年弱ではありましたが、時に先生の発する寸言は私達の心の中にその形を留めております。

先生の言葉で今もなお心に刻まれているものに、「君たちは紳士なのだ」という言葉が有ります。その大意は、「何時でも何処でも堂々と振るまえ。たとえ、不器用でも人間らしくあれ」といった所と解し、その後の人生に於いても時にこの言葉を反趨し、昔の海軍兵学校の五省に倣い、「言行に恥ずるなかりしか」を行動指針にしてきました。

木島先生の人物像は常に私たち生徒を信頼し、自主性を重んじてくださったことです。(自分で考え、行動し、結果に責任を持つこと)

私見乍ら、先生と生徒の関係は決して時間の長さではありません。

教師の持つ熱意と信念、加えて生徒を包み込む人間性に有ると思えます。

先生は私たちとの間に程よい距離を以て接してくださいました。

良い仲間との出会いは固より、よき師との出会いを得たことは何物に代え難い人生の宝物です。

平成22年9月、クラス幹事(故高橋文哉氏等)の発案に依り、先生お住まいの新潟県小千谷市に赴き、50有余年振りの再会を果たす企画が実行に移されました。この地は錦鯉の養殖地として有名ですが、今一つ“片貝の花火大会”も全国的に知られております。この日は花火大会を先生とご一緒して、その後然るべきところで再会の宴を開く事となりました。

幸い天候にも恵まれ、天空を彩る大輪の花火にしばし心を奪われ、何度か感嘆の声を上げたことでした。

市内料亭の宴では、皆昔の学童に戻り、先生との会話を愉しんだのを、い

までも鮮明に覚えております。私達は固より先生も楽しそうに会話の輪の中に溶け込んでいるようでした。(詳しくは文集「櫛の香」の25ページ、三木邦之さんの作品を)

既に天空の星となって私達を見守ってくれている仲間達。(クラスの半数が物故)

今、先生も天空に向かい悟りを求めて菩薩の列に並び、往時の風貌を留め乍ら歩みを進めている事と思います。

席を空けて先生の到来を待つ仲間達！ 果たして先生との出会いにどんな企画を用意していることやら。きっと又昔話に花が咲く事でしょう。

仲間達の笑声が天空に飴するようです。

木島先生！ 本当に永い事お疲れ様でした。

どうかごゆっくりお休みください。

先生との出会い幸せでした。

本当に有難う御座居ました。 (合掌)

令和5年7月4日

小田高第11期3年2組

久野厚夫